

カリキュラム・マネジメントの能力を育む保育者養成の課題

A Study on development of professional competencies
for curriculum management of Early Childhood Educators

高 橋 さおり* 清 水 桂 子*
Saori TAKAHASHI Katsurako SHIMIZU

I 課 題 設 定

本稿は平成29年3月告示の幼稚園教育要領および学習指導要領の改訂のポイントとされるカリキュラム・マネジメントの確立に注目し、そうした能力を育成する保育者養成の課題について考察するものである。

中教審答申「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」（平成24年8月28日）では、教員自身が探究力を持ち続ける存在であるべきといった「学び続ける教員像」の確立が求められている。教員養成教育においては「『教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修』を行う段階であることを改めて認識することが重要」であり、教職生活を通じて学び続けるために必要な資質・能力を身につける養成教育を行っていくことが留意されなければならない。こうした流れをふまえ、清水は保育士の専門性の構築や保育士のキャリアアップを前提とした〔保育の理解〕について考察し、養成校としての教育課程の検討の必要性について述べた¹⁾。また高橋・高瀬は、教員養成教育を行う上で、自らの養成教育を受けた学生の到達基準として各種免許状を有する教員それぞれに求められる資質能力を明示し、それを身に付けるためのカリキュラム・マネジメントの必要性について述べた。特に短期大学士を基礎資格とした2種免許状を取得するためのカリキュラムについて「1種免許状との比較において、修得すべき単位数が少ないという意味ではなく、教員として必要かつ最小限の資質能力の育成に不可欠な内容が精選されたものであることが求められる」ことを指摘した²⁾。

こうした政策動向やそれを踏まえた研究の根底には、社会の複雑化や高度化が急速に進展する中、保育者に求められる専門性とはどのようなものであり、養成段階におけるカリキュラムをどのように改善していくべきか、といった問題意識が存在している。そのため、本稿は、まず、学習指導要領および幼稚園教育要領の改訂をめぐる状況を整理し子どもたちに身に付けさせたい資質・能力を明らかにする。次に、カリキュラム・マネジメントの概念やその意義・ねらい等についてまとめた上で、カリキュラム・マネジメントに参画できる保育者をどのような教育内容・方法をもって養成していくかについて考察する。 (高橋さおり)

*北翔大学短期大学部こども学科

Ⅱ 学習指導要領および幼稚園教育要領の改訂

平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（中教審第197号）を経て，平成29年3月に学習指導要領および幼稚園教育要領が告示された。今回の改訂では，これからの社会を担う子どもたちに求められる資質・能力が三つの柱として整理され，学校と家庭・地域がその資質・能力や教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し，連携・協働するために「社会に開かれた教育課程」の必要性が重視されている。また，子どもたちが「何を学ぶか」に加え「どのように学ぶか」という学習プロセスをもとに「何ができるようになるか」の明確化に重点が置かれ，「主体的・対話的で深い学び」を行うことが求められる。学校教育では子どもたちの実態を踏まえながら，こうした学びを計画・実施し，学習指導要領等を手掛かりとしながら教育の質の向上を目指し，改善を図り続ける「カリキュラム・マネジメント」の実現が目指される状況にある。

未来の社会の創り手となる子どもたちに求められる資質・能力（三つの柱）は，幼児教育から小学校・中学校・高等学校教育へ一貫するものとして次のように示されている。

- (1) 何を理解しているか，何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）
- (2) 理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）
- (3) どのように社会・世界と関わり，よりよい人生を送るか（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養）

小学校以上の校種においては，どのような資質・能力を育むかということが各教科等で具体的に提示される。幼稚園教育要領ではこれらに通じる「幼稚園教育において育みたい資質・能力」が，保育内容5領域の枠組みの中で遊びを通して総合的に育まれるものとして，以下のよう整理された。

- (1) 豊かな体験を通じて，感じたり，気付いたり，分かたり，できるようになったりする「知識及び技能の基礎」
- (2) 気付いたことや，できるようになったことなどを使い，考えたり，試したり，工夫したり，表現したりする「思考力，判断力，表現力等の基礎」
- (3) 心情，意欲，態度が育つ中で，よりよい生活を営もうとする「学びに向かう力，人間性等」

さらに「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」のねらい及び内容に基づく活動全体を通して育まれた資質・能力のあらわれが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として具体的に【(1) 健康な心と体 (2) 自立心 (3) 協同性 (4) 道徳性・規範意識の芽生え (5) 社会生活との関わり (6) 思考力の芽生え (7) 自然との関わり・生命尊重 (8) 数量や図形，標識や文字などへの関心・感覚 (9) 言葉による伝え合い (10) 豊かな感性と表現】と示された。

このことについて，無藤隆³⁾は「実際の指導ではこれらが到達すべき目標を示したものではないことや，個別に取り出されて指導されるものではないことに十分留意する必要がある」，また神長美津子⁴⁾は「小学校教育でも，その後の教育でも重視される項目」であり，「幼児期

の修了段階では、ようやくこうした10項目の視点から子供の資質・能力を見ることができるようになり、小学校の教員と共通の視点で子供の育つ姿や教育を語ることができることになったことを意味している」と指摘する。今回の改訂では新たに設置された前文において、幼稚園が「学校教育の始まりとして」教育基本法に示される教育の目的や目標の達成を目指すことが示された。「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なもの」である幼児期の教育は、今回の改訂において「学校教育の始まりとしての幼稚園」という位置づけがさらに明確化されたといえる⁵⁾。「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」については、子どもたちに求められる資質・能力が幼児教育から高等学校教育まで一貫したものであることも踏まえつつ、こうした視野のもとに捉えていく必要がある。

また「主体的・対話的で深い学び」について、遊びを通して総合的に学ぶ幼児教育では、以下の視点から絶えず指導の改善を図っていくことが必要とされている（中教審197号）。

- 周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。
- 他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。
- 直接的・具体的な体験の中で「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える「深い学び」が実現できているか。

ここで示される「見方・考え方」については、幼児が環境に主体的に関わり、心動かされる体験を重ね、遊びや生活が広がる中で環境との関わり方や意味に気づき、試行錯誤したり、思い巡らしたりすることと整理される。保育者は常にこうした視点のもとに日々の実践の評価を繰り返しながら、子どもたちが身に付けるべき資質・能力の育成を目指し、保育・教育の実践に取り組むことが求められる。（高橋さおり）

Ⅲ カリキュラム・マネジメントの概念

これからの幼児教育では「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を踏まえて教育課程を編成・実施し、評価・改善を図っていくことが期待されている。その際、幼児や地域の実態を踏まえながら、必要な人的・物的体制を確保し、その改善を図ることを通して、各幼稚園の教育活動の質の向上が目指される⁶⁾。また、カリキュラム・マネジメントは教職員全員で構築していく営みであり教員一人一人の姿勢が重要であること、幼稚園等は環境を通して行う教育であること、家庭との関係の緊密度が高く教育課程外の活動（子育て支援等）も広く行われること等をふまえ、中教審197号では、以下の三つの側面からカリキュラム・マネジメントを捉える必要があるとしている⁷⁾。

- ①各領域のねらいを相互に関連させ、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」や小学校の学びを念頭に置きながら、幼児の調和の取れた発達を目指し、幼稚園等の教育目標等を踏まえた総合的な視点で、その目標の達成のために必要な具体的なねらいや内容を組織すること。

- ②教育内容の質の向上に向けて、幼児の姿や就学後の状況、家庭や地域の現状等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立すること。
- ③教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、家庭や地域の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること。

以上の3点を踏まえ、横松友義⁸⁾は、幼稚園カリキュラム・マネジメントを「各幼稚園が国の教育課程基準の実現と特色あるカリキュラムを創り出して、保育目標を明確化し、その実現のためのねらい・内容の全体を計画し、職員同士、あるいは、職員と保護者や地域の人々等とが協働して、内外の物質的資源等を効果的に活用しながら、保育を実施し、評価し、改善していくこと」と定義し、各幼稚園で本格的なカリキュラム・マネジメントを成立させるための諸条件として〈教育課程の保育目標が、教育基本法及び学校教育法に示されている目的及び目標を実現しようとするものになっており、園の特色あるカリキュラム創りを実現できるものになっていること〉〈教育課程のねらい・内容によって幼稚園教育要領のねらい・内容が実現できるようになっており、幼児期の終わりまでに育てほしい姿の実現に近づこうとしていること〉〈教育課程のねらい・内容が園の特色あるカリキュラム創りを実現するものになっており、教育課程において保育の目標・ねらい・内容の関連性が確保されPDCAサイクルを回すことが出来ていること〉〈各職員と保護者や地域の人々等とが協働して、内外の物質的資源等を効果的に活用しながら、園の教育課程に基づく保育を創造していること。〉を挙げている（一部筆者整理）。

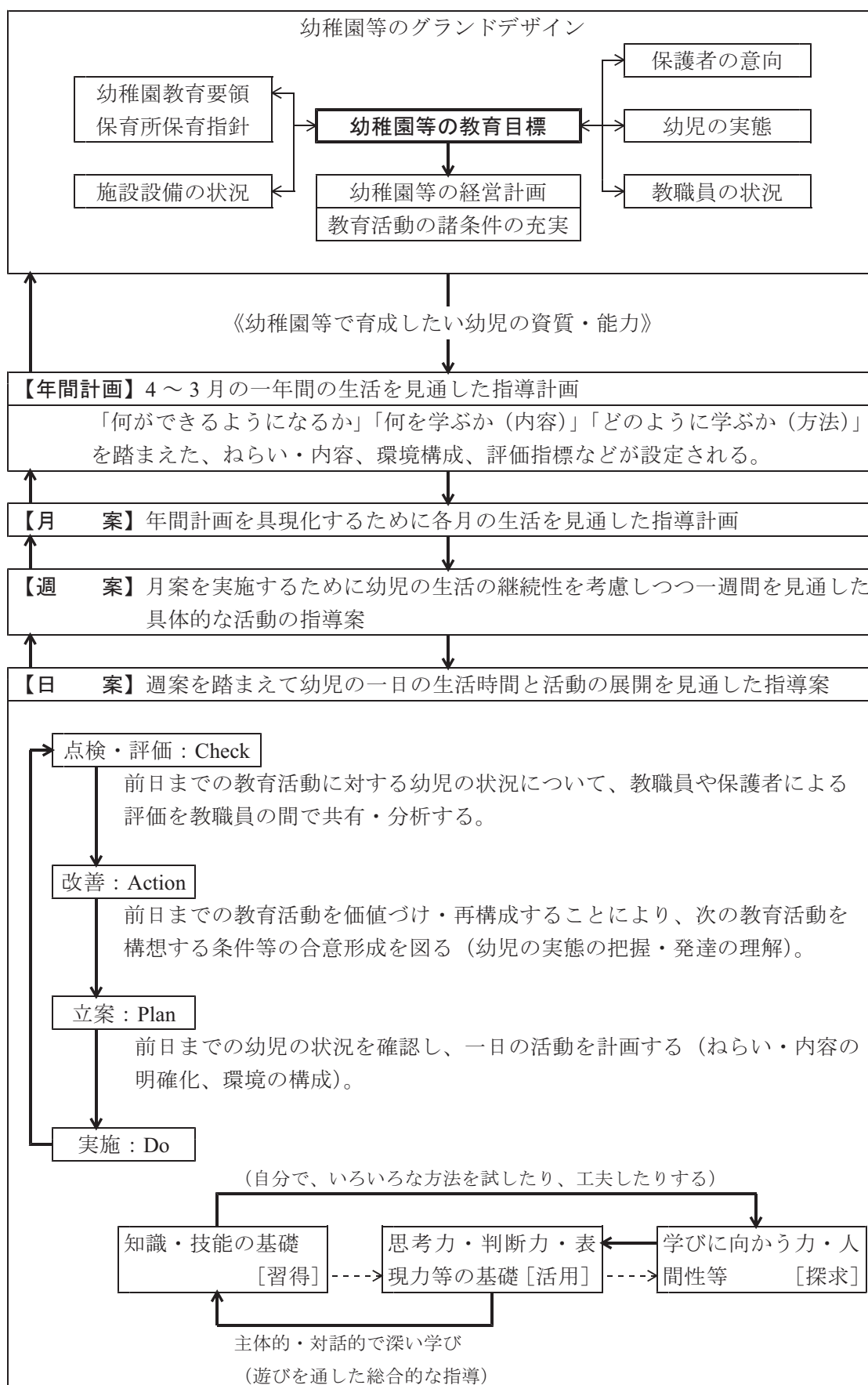
高瀬淳⁹⁾は、カリキュラム・マネジメントの全体的なイメージを図1のように提示している。これによれば、幼稚園等のグランドデザインは、保護者の意向や幼児の実態、教職員の状況などの内外環境によって規制されるものであり、指導計画（日案、週案、月案、年間計画）はそうした幼稚園等のグランドデザインと対応したものでなければならない。つまり、カリキュラム・マネジメントは、幼稚園等が設定する保育目標を実現するために絶えず教育課程を改善・変革していく営みを意味するものであり、その際、幼稚園等をめぐる内外環境の諸条件を改善・充実させることが含まれる。したがって、各幼稚園等の特色は、内外環境の諸条件を踏まえながら教育課程を計画（編成）—実施—点検・評価—改善していくプロセス全体の結果としてあらわれてくるものであると指摘できる。（高橋さおり）

IV 保育者養成カリキュラムの検討

以上のことから、カリキュラム・マネジメントは、幼稚園等における教育課程が、保育内容の計画としてだけでなく、どのように保育を行っていくかといった保育の方法の計画として捉えることの必要性をあらわしていると考えられる。つまり、カリキュラム・マネジメントに参画できる保育者とは、子どもに身につけさせたい資質・能力を明確にした上で、所属する幼稚園等の内外環境の諸条件を踏まえた教育課程について、保育の内容と方法の両面から、みずからの取り組みを適切に点検・評価し、改善していくことのできる者であると捉えられる。

本学短期大学部こども学科においては、「保育内容領域」に関する授業科目として1年前期

図1 カリキュラム・マネジメントのイメージ



に「保育内容表現」、1年後期に「保育内容環境」、「保育内容言葉」、2年前期に「保育内容人間関係」、2年後期に「保育内容健康」を配置した教育課程となっている¹⁰⁾。このように「保育内容領域」は1年前期から2年後期まで継続的に配置されており、学生が、2年間の修業期間を通して、幼稚園等で「何を教えるか」について学修する流れがつくられている。このことを前提とすれば、「保育内容領域」に関する授業科目は、学生による学修の進行に伴って、幼稚園教育要領等に示された指導目標や各幼稚園等の保育目標と関連づけられ、「どのように教えるか」といった保育の方法を学生自らが検討する中で学ばれるように教育課程全体で配慮される必要がある。個々の「保育内容領域」に関する理解を総合化していくための学修機会を学生に保障する取り組みが必要となる。

たとえば、本こども学科では、「保育内容総論」が1年後期、「教育課程論」と「保育課程論」が2年前期に配置されているが¹¹⁾、これは、2年間を通じた「保育内容領域」に関する学修の中間に位置づいていることそれ自体に意義を見出すことができる。つまり、学生は、「保育内容表現」（1年前期）に関する知見を手がかりとして、「保育内容総論」（1年後期）で学修する保育の内容と方法の関連性について考え始めるとともに、それと並行して「保育内容環境」や「保育内容言葉」（1年後期）に関する理解を深めることになる。それを受けて、「教育課程論」と「保育課程論」（2年前期）において、子どもに対する意図的・計画的・組織的な保育の必要性に対する意識を高めつつ、「保育内容人間関係」（2年前期）や「保育内容健康」（2年後期）の学修を進めていると指摘できる。

こうした学修のプロセスを十分に配慮することで、学生は、「保育内容領域」に関する理解を自ら計画する指導案や幼稚園等の経営と結びつける思考が養われるのではないだろうか。「保育内容領域」の一つを学修する点では同じであっても、学修する時期（学生の思考・経験値の違い）によって、その理解の仕方や学び方は自ずと異なるはずである。また、カリキュラム・マネジメントそれ自体の内容は、例えば「教育課程論」を中心として学修することが想定されるものの、学生が幼稚園等の保育・教育活動全般を見通してマネジメントを捉え、自ら作成する指導案をカリキュラムの一部として理解することは、必ずしも容易ではない。それは、保育を学ぶにあたり、学生たちはまず、子どもの生活全体を通して行われる保育が、保育内容の領域相互が往還し身近なあらゆるものとのかかわりの中で生じるものであることを、具体的な遊びを通して知ることから始めるためである¹²⁾。

また、本こども学科では、1年次の大学祭（9月実施）にあたり、例年「こどもの国」を開催している。これは、実際に近隣の子どもたちを招いての遊びの広場を企画・運営するものであり、学生にとって意義深い経験的な学びの機会と捉えられる。1年前期に履修する「保育内容表現」等の学びが、「こどもの国」の企画・運営を通じて具体化された上で、「保育内容総論」の学修につながることで、学生は、具体的な事例を画像や映像資料を活用しつつ子どもの理解を深め、保育の展開について考察することが可能になる。この意味において、1年前期に実施する「こどもの国」の取り組みは、学生が自らの実践を省察する力を養う上で非常に意義深い

ものと言えよう¹³⁾。

学生たちが保育者になった際は、各幼稚園等の保育目標に基づき子どもたちに身に付けさせたい力を明らかにし、園での活動全体を通してそれらを育むことができるよう「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を具体的に想定しながら指導計画を作成して、実践する力が求められる。さらに、子どもたちが主体的・対話的で深い学びが実現できているかどうかという視点のもと、地域や保護者の状況や願いをふまえつつ、日々の実践を点検・評価し、常に改善していく力（PDCA サイクルの確立）が必要となる。本こども学科の教育課程においては、こうした点に留意しながら、学生の経験や思考のプロセスに基づいた学修の系統性を確立していくことが求められる。（清水桂子）

V お わ り に

カリキュラム・マネジメントに参画できる保育者を養成するための方法について検討してきた。本稿の問題意識は、はじめに述べたとおり「学び続ける教員像」の確立を図ることを目指すところにあるが、「学び続ける教員像」の確立を図る保育者・教員養成カリキュラム開発には、学生に身につけさせたい保育者・教育者としての具体的な資質能力を教員相互で共有し、そのために必要な手立てについて合意形成を図り、実施した学生に対する指導・支援の適切性を評価していくサイクルを確立することが必要であることは既に述べたとおりである¹⁴⁾。保育・教育のカリキュラム・マネジメントの重要性が指摘されて久しいが、これは養成校側のカリキュラム・マネジメントや指導体制そのものが問われていることにほかならないと考えられる。

（高橋さおり・清水桂子）

注

- 1) 清水桂子「保育者養成・教員養成における〔保育の理解〕に関する一考察」2016年3月『北翔大学短期大学部研究紀要』第54号。特に保育士養成に焦点を当て、2年課程の養成で身に付けた基礎を、就職後は現場での実践を深めながら活かしつつ、継続的に学び続ける必要性を指摘した。
- 2) 高橋さおり 高瀬淳「「学びつづける教員像」の確立を意図した教員養成カリキュラムの開発について—国語（文学）の教科内容構成と道徳科指導法・特別活動指導法との関連性に着目して—」2017年3月『北翔大学短期大学部研究紀要』第55号、105頁。
- 3) 無藤隆監修「《幼稚園教育要領改訂 保育所保育指針改定 幼保連携型認定こども園教育・保育要領改訂》について」同文書院。
- 4) 神長美津子「幼児教育における改訂のポイント」 無藤隆、『新教育課程ライブラリ』編集部編『中教審答申解説2017「社会に開かれた教育課程」で育む資質・能力』2017年3月ぎょうせい74頁。
- 5) 注3に同じ。

- 6) 平成29年3月告示『幼稚園教育要領』第3教育課程の役割と編成等1教育課程の役割.
- 7) 中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」中教審第197号，平成28年12月21日.
- 8) 横松友義「各幼稚園でカリキュラム・マネジメントを成立させるための研究者の協働の構想」2017年11月『岡山大学大学院教育学研究科研究集録』第166号.
- 9) 高瀬淳「教育目標を実現する「マネジメント」の課題」2017年11月8日 岡山大学教育学部附属幼稚園 幼児教育研究会シンポジウム 配付資料.
- 10) 2017年度教育課程による.
- 11) 注10に同じ.
- 12) 清水桂子「保育者養成における遊びの展開から理解へ導く〔保育内容総論〕の授業展開と一考察」2015年3月『北翔大学短期大学部研究紀要』第53号参照. 保育を理解するためには，学生自身が身近なものに目を向け，保育の展開につながる要素について知ることが重視されると指摘している.
- 13) 学生の理解を促す経験として各種実習も当然のことながら重要な役割を持っている.
- 14) 注2に同じ.